

---

# スイッチを抱きしめれば

狩人二乗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スイッチを抱きしめれば

### 【Nコード】

N3332I

### 【作者名】

狩人二乗

### 【あらすじ】

僕が初めて他人に殺意を抱いた時、僕の目には爽快感溢れる情景が広がり、僕の中にはその情景へと移行出来るスイッチが作られた。

(前書き)

テーマ」いじめ

とりあえずリアルを目指しました。すぐに読み終わられるので、暇つぶしに読んでやってください。

「キヤーーー!!」

「大竹……お前……!!」

僕という人間は実はこういう奴なんだ。

教室の床に初めて見る血の池が広がる。

僕の両手には四つある脚の一つに血がついている椅子が振りかぶった状態である。

目の前には四人の男子。

殴る前は昼放課にも関わらず僕に嫌がらせをしていた四人のクズ共。

三山。佐川。矢島。新橋。

周りには僕がどんな目にあってもクスクス笑うだけで何も対応しなかったダメ人間達が僕の突然の暴挙に驚いている。

僕はこの日、スイッチを押したんだ。

「おい、聞いてんのか大竹え？」

「……はい。聞いてます」

そんな事を考えながら、僕は目の前の四人にパシられようとしている。

こんな奴ら。僕がスイッチを押せば楽勝に倒せるんだよ。

「わかったか？ 今からダッシュで購買に行つてこい。鳥肉パンは今日しか買えねえんだ。ちゃんと四人分買ってこなかったらどうなるかわかつてんだろうな？」

「……はい……わかりました……だからもつ……」

「よし。行ってこい」

こうして僕は昼放課の教室を駆け足で抜け出した。  
あんな奴ら。僕がスイッチを押せば簡単に消せるんだよ。

そう考えて走る僕には、傍目からじゃわからない程度の蹴り跡があった。

スイッチに気付いたのは中学二年生の中頃だった。  
部活で虐められて、他人に初めて殺意が芽生えた時、僕は自分の感情の奥にあるスイッチを見つけた。

心の中に眠る形の無いスイッチは、押すと今までの情けない自分を切り換える物だと理解した。

それからだ。僕の目に、スイッチを切り換えた後の情景が浮かぶ様になったのは。

スイッチを押したら僕は僕を虐めている奴らを倒せる。  
そんな突拍子もない考えが頭の片隅にいつも潜む様になった。

「また押せなかった……スイッチを押せばあんな奴ら……」  
「はあ。バツカじゃないの？」

僕がスイッチのことを喋ったのは今までの人生の中でたった一人。  
僕より三つ年上で幼馴染みのさつき姉ちゃんだけだ。

「あっちゃんってホント情けなさ過ぎ。スイッチを押せば倒せる……  
…スイッチを押せば切り開ける……スイッチを押せばスイッチを押せばスイッチを押せば……。最近あっちゃん、スイッチにしがみついたらばかりで現実から目を背け過ぎなのよ」

「そ……そうなのかな……」  
「そう。スイッチがあるってのは充分にわかったから、そのスイッチを使った時、私に教えてちょうだい。あっちゃん、あんたはそれからよ。あっちゃんはそうしたら、絶対に変わるんだから」

長身でスラリとした体型。肩までしか伸ばしていない黒髪に反比例して出る所はちゃんと出てるさつき姉ちゃんは、誰が見ても目を

疑う程の美人だった。

それだけじゃない。さつき姉ちゃんの顔は自身に満ち溢れており、近所の有名大学に入ってから、一層美しさに磨きがかかったみたいだった。

僕とは正反対なさつき姉ちゃん。会うだけで自分がどれ程小さい人間なのかがわかる。

それでも、僕はさつき姉ちゃんだけにはスイッチのことを話した。何故ならば、

「……私だって変わったんだから」

昔、さつき姉ちゃんは僕よりも酷い虐めを受けていた。

小学生の頃。僕が小学一年生でさつき姉ちゃんが小学四年生だった時、僕は校庭でさつき姉ちゃんの全身に白いチヨークの粉が掛かっているのを見かけた。

泣きながら、さつき姉ちゃんは白くなった頭を水道の水で洗い落とそうとしていた。

状況が全く理解出来なかったので、とりあえず校舎に戻ろうとした僕はふと見上げると、三階の窓から上級生と思われる人達が笑いながら下を見下ろしているのを見た。

視線の先にはさつき姉ちゃんがいた。

「ババコンガきたね〜」

「真っ白じゃねーかよ〜。誰かにぶっかけられたのか〜？」

「ヤあダメもう。高崎エローい」

アハハハハ……アハハハハ……

アハハハハ……アハハハハ……

昼の放課。窓から笑い声が響く。

さつき姉ちゃんはそんな窓を見て、笑いながら泣いていた。

翌日。僕はババコンガというのがあるゲームのキャラだというのがわかった。

主人公に糞を投げ付けて攻撃したりオナラを大音量でしたりする、

作中一番汚い敵キャラだった。

「起立。おはようございます」

お決まりの言葉から始まる朝のホームルーム。僕はこの時間が一番好きだった。先生が淡々と連絡事項を伝える事務的な空間。誰も喋らないここは、僕が安心して要られる唯一の場所だった。

「だけど、今日のホームルームはいつもと違っていた。

「先生は怒っています」

四十代後半でまだ結婚していない黒柳先生は、壇上をバンと勢いよく叩き、話しを切り出した。

「大竹君のことです」

「グハッ」

校舎の裏。昨日は教室でやられていた行為を今日はもっと手酷くやられていた。

「大竹くん。君、なんで俺らのことチクっちゃってんの？」

三山。

「そんなことして俺らが黙ってると思ってるのか？ おかげで黒柳に調子こかれちゃまったじゃねーか」

佐川。

「くつくつく……一回死ぬかお前」

矢島。

「おい！！なんか言えよテメー！！」

新橋。

「カハッ……知らないです……違います……僕じゃありません……」  
「ああ？ 何言ってるか聞こえねーんだよ！！」

三山。佐川。矢島。新橋。

四人は性懲りもなく暗がりの中で僕を囲み、暴行を加えていた。腹だけでなく、足も。腕も。背も。胸も。手も。腿も。ふくらは

ぎも。すねも。股間も。

顔だけは除けて、僕を蹴っては殴り、蹴っては殴りの反復をし続け、十五分が経った頃だろうか。四人は僕に唾を吐き、その場を去っていった。

僕の目の前には、四人が泣きながら僕に許しをことう情景が広がっていた。

ふらつく体に鞭を打ちながら、僕は立ち上がる。

誰だ？ 誰がこんなくだらないことをしでかしたんだ？

僕はそいつにならスイッチを押せるかもしれない。

そんなことを思いながら、怒りと虚しさに満ちた僕は水道の水を被りに行った。

体は土と足跡で泥だらけだった。

「生徒会長の谷口君よ」

この日の放課後、黒柳先生は犯人の名前をいとも簡単に教えてくれた。

谷口正孝。同級生で同じクラスの彼は品行方正、成績優秀、スポーツ万能、外見も良く身長も高いというこの世の全ての良さをかき集めて完成された人間といっても過言ではない完璧な男だ。

「今朝ね。職員室に来て「クラスの大竹君が三山君、佐川君、矢島君、新橋君の四人にいじめを受けてます」なんて言ってきたね、ホームルームで取り上げて下さいなんて言ったのよ。それを聞いて先生も、まあ大変って思ってたね、朝言ったわけ」

今の今まで何の反応もしなかった谷口正孝が突然行動に起こした理由がわからない。二度とこんなことが起きないように、注意を促さなければいけない。

考えながら俯いていたら、黒柳先生が心配そうな顔で僕を見ていることに気付いた。

「大丈夫なの？ 先生心配なのよ。大竹君がいじめられてると思う

と……ね。何か先生に出来ることはある？ もう一度いじめられたらちゃんと先生に言ってる？ わかった？」

「はい……わかりました……」

そうして僕は職員室を出た。

拳に力を込めながら。

憤りを感じる。

黒柳先生の顔は今まで僕が見てきた物と全く一緒だった。

偽善者の顔だ。

おそらく黒柳先生はこれで安心だ、と勝手に思っているだろう。

私はちゃんと虐めに対応した。もうやることはない。私はやるべき事をちゃんとやったんだ。そうやって自己完結してしまう。

実際は何も解決していないのだ。

黒柳先生の行動は、寧ろ虐めを悪化させるだけに過ぎない。中途半端な介入は『いじめる者』の感情を苛立たせるものでしかないからだ。

こうして『いじめられる者』は追い詰められていく。

虐めは絶対になくならない。間違いなく、なくならない。

テレビドラマなんかでは何か事件が起きてそれをいじめられる者が解決したり、いじめられる者を理解してくれる人間が出来てその人が解決に導いたりする。しかし、現実ではそんな奇跡、絶対に起きない。

口で言うのは簡単だ。イジメハダメデス。イジメハナクサナキヤダメデス。ナクシマシヨウ。イジメヲナクシマシヨウ。

でもそんなのは口だけだ。

実際には、絶対になくならない。

いじめられる者が変わらない限り。

だから僕はいつか、スイッチを押さなければならぬ。

「なんだ君か。後ろから忍び寄るからストーカーかと思ったよ」

谷口正孝はバレーボール部に所属している。部活が終わる六時まで校門前で谷口正孝を待ち、一人で歩く所までついていった。

そして電柱の下。頼りない明かりが地面を照らす場所で、僕は谷口正孝に問い詰めた。

「なんで……黒柳先生に……言った……の……？」

「ああそのことか。決まってるだろ。生徒会長だからだよ。同級生が虐められてると知ったら放ってはいられなくてね」

谷口正孝は終始無表情だった。下らない。早く消える。そんなことを僕に無言で言っている様に見えた。

しかし、僕はここで食い下がってはいけない。

決意を固めて、僕は谷口正孝を正面に見据えた。

「嘘……だよね……」

「ああ？」

瞬間、谷口正孝は苛立った表情を僕にしてみせた。その顔を僕は知っている。なんて奴だ。こいつは生徒会長なんかで収まる奴じゃない。

これは『いじめる者』の顔だ。

「う……だ……だ……僕は五月から教室でも蹴られてた……今は十月……もっと早く気付いてたでしょ……？　なのに……なんで今にな……って……」

「はあー、まったく鬱陶しいなあ君は。わかったよ。本当のことを言……ってやる」

そう言って谷口正孝は、僕を殴り飛ばした。

「グハッ」

電柱に頭をぶつける。後頭部がズキズキと痛む。手で触ると血が付いた。

「……前々からうざかったんだよ君が。それでも俺は生徒会長だ。頑張ってる堪えていたんだが、もう限界だった。だから俺は君を消そ

うと思った。けど俺が直接手を加える訳にはいかない。ならばどうすればいい？ どうすれば君は消える？ 答えは簡単だ。虐めを悪化させればいい」

谷口正孝は笑いながら僕を見下ろした。革靴を僕の腹に蹴りつけ、服に何度目かの跡を残す。

「早く俺の前から消えろ」

僕の目の前に、谷口正孝が僕に土下座して懇願している情景が広がった。

この日も僕はスイッチを押せなかった。

翌日。朝僕が教室に入るとクラスから笑い声が微かに響いた。クラスメイトが皆、僕を見て笑っている。

何事かと思いながらも冷静を偽り、席に近づくと、僕の机の上に紙が貼ってあった。

死ね

赤い文字で小さく、二文字だけ書かれていた。

三山は笑い、佐川も笑い、矢島も笑い、新橋も笑い、谷口正孝はこちらを見てもいなかった。

他の奴らは一通り僕を見た後、直ぐさま会話に戻った。

僕の立ち位置は完全に悪化してしまっていたらしい。

教室が血で染まる光景も、今の僕には何の気休めにもならなかった。

スイッチはまだ押せない。

そんなある日、机の中に一通の手紙が入っていた。白い便箋にハートマークのシール。

中を読むところ書いてあった。

あなたが好きです。今日の放課後、校舎の裏で待っていて下さい。

そして放課後。僕は手紙にかかれてあった通りに校舎の裏へと向かった。

手紙を読み終わった時、僕は何も感じなかった。もちろん今も。普通の男子なら喜ぶ場面なのだろう。小躍りくらいするかもしれない。

だけど僕は何も思わなかった。

太陽の光りが届きにくい校舎の裏には誰もいなかった。まだ来ないのかと考え、そのまま立って待つこと一時間。

「よー大竹え。誰待ってたんだ？」

三山。佐川。矢島。新橋。

例の四人組だった。ここまできると鬱陶しさが呆れに変わる。そこまで暇なのか、お前達は。

「誰がお前なんか好きになるんだっての。俺達だよ。あの手紙を書いたのは」

ハハハハと四人の笑い声が重なる。僕はしばらく呆然としていた。

「ほら。右手にずっと持ってる手紙返せ。何期待してたお前は…あ？」

僕の手から無理矢理手紙を奪いとり、破り捨てようとしたのだろう。そんな風に手をかけた時、三山はふと動きを止めた。

「どうした？」

他の三人も三山の不可思議な言動に戸惑いを覚える。

一度閉じた口を、三山は静かに動かした。

「これ……俺達を書いた手紙じゃない……」

「はあ？ んな訳ないだろ。それが本当ならこんなだせー奴に手紙を出そうとした女が居るってことだぜ？ 有り得ねえ有り得ねえって……え？」

新橋も途中で口を閉じた。他の二人も同様に啞然としている。

「誰だよそのふざけた女はっ!？」

三山は手紙を景気よく破り捨て、僕を蹴った足で手紙だった紙屑を踏み潰した。

四人は腹いせに僕を一発ずつ殴ってから、走って退散した。

息を整えながら四人が立ち去るのを確認し、四人が校舎の裏で仰向けに意識を失っている光景を目にしながら、僕は溜め息をつく。

「ふー。ようやく帰ったねあの四人。先に手紙が入ってたからさ、あいつらが立ち去るのを待ってたの。ごめんね大竹君。見て見ぬフリして」

よく喋る人だなあとと思いながら、手紙の主を見た。

「初めまして。私、進藤京子って言います」

ツインテールに縛った金髪。スレンダーな体格。身長は僕と同じくらいでよく喋る。

進藤京子と名乗った女性は怪我をした僕を労りながら、そのまま僕の家へ転がり込んだ。

「ひつどーい。アタシ達、同じクラスじゃないって言っても隣のクラスだよー？ アタシの顔、ホントーに見覚ええない？」

「う……ん……」

「えー。アタシはいつつも大竹君のこと見てたのにー。いつもだよ？ 下校中も見てたんだから」

「え……そうなの……?」

「そうだよ。だからアタシ、いつストーカー呼ばわりされるのか内

心ビクビクしてたんだからね。いやでも、ストーカー呼ばわりの方がいいかな。顔すら知られてない状況よりは」

「いや…そうじゃ…なくて……」

「え？ なーに？」

「い……いつも見てたなら………なんで僕を……？」

僕は四人に虐められていた。それだけではない。最近では四人以外にも虐めを受けていた。

誰も手を貸さず、遠目で僕を笑う日々。黒柳先生すらあれから僕のことを一日も話題にせず、ただただ虐められる時間が僕を取り巻いていた筈。

そんな人間のどこを好いたんだ？

「そんなの簡単よ。私も昔、虐められてんだから」

今まで明るかった進藤さんは、僕と同様に俯いた。

「私は中学生一年生の始めだったの。入学式に重なる様に転校してきてね。入学したてで調子に乗ってた私は新しい友達を早く作ろうと思ってアピールしまくったのよ。給食の牛乳を運んだり掃除を代わってあげたり、宿題も見せたり積極的に発言もしたり………虐めを見逃せずに先生にチクったりもしたわ」

彼女の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。明るく振る舞う彼女なりのトラウマなのだろう。それを今、真剣に僕に話そうとしているのだ。

「そうして虐めの標的になった私は、中学二年の時。グレたのよ。この金髪もその時の名残でわざと残してあるの。これは教訓。私は学んだのよ、大竹君」

「で………なんで僕を………す………す………好きになったの………？」

「ああ。それはね、義務よ」

彼女は先刻とは違う、とても明るい表情でそんなことを言いのけた。

「虐めはなくさなきゃいけない。でもなくせない。下手なことをし

たら自分も巻き込まれる。そんなの嫌。堪えられない。だつたら私は何をすればいいの？ 何をすれば虐めをなくせるの？ そう思いながら大竹君をストーキングしてたら思いついたの。そうだ、私が虐められてる人の恋人になって、虐めを忘れさせてあげられるくらいがいい思いをさせてあげればいいのよってね。そうすれば虐めはなくなったことになるわ。ねえ、そうでしょう？ 大竹君？」

そう言いながら進藤京子は学生服を脱ぎ始めた。リボンを取り、セーターを脱ぐ。次第に素肌があらわになっていき、最後には下着だけになる。

進藤京子。

どうやらこの人は、今までの誰よりもたちが悪いらしい。

善い事をしていると思いついて行動している。

「大竹君……ブラジャー外してくれる……？」

そんなことを言い、僕に近づいた。

自分がどれだけ酷いことを言っているかわからず、ただ単純に自分の要求を突き通し、早々に完結させようとする最悪な人間性。

僕の目にある光景が浮かんだ。

僕はスイッチを押した。

「……ふざけんな」

「キヤアッ」

気付くと僕は進藤京子を突き飛ばしていた。その拍子にとれかけだったブラジャーが外れ、胸が完全にあらわになるが、そんなこと全く気にしない。

「いらねえお世話なんだよ！！ 寧ろ余計だ！！ 何様だお前は！！ 結局なんなんだお前！？ 俺を哀れんでるだけじゃねえか！！ そんな義務感クソくらえだ！！」

「ひ……酷い……アタシ、大竹君のことを考えてやってるのに……」  
「だからそれがいらねえんだよ！！ いいか！？ 二度とこんな行

動起こすんじゃないやねえ！！ 虐めを無くしたいなら違うことをしろ！  
！ とにかくお前は間違ってるんだよ！！ わかったらとつとつと服  
着て帰れ！！」

「うっ……うっ……」

大量の涙を流しながら服を手慣れた作業で着、こちらを一度も振り返らずに進藤京子は去って行った。

「……やった」

やったぞ……遂に僕はスイッチを押した！！ スwitchを押せたんだ！！

四人より弱い進藤京子に対して。

……何だ……結局は僕は四人に対して押さずに、押しても安心だった進藤京子くらいにしか押せないのか。

三山。

佐川。

矢島。

新橋。

そして谷口。

この五人の誰かを相手にスイッチを押さないと意味がない。

これはさつき姉ちゃんに話すべきことじゃないな。せつかくスイッチを押せたのに。ようやくスイッチを押せたのに、僕は僕を変えられることが出来なかった。

そんな情けない僕が恨めしかった。

誰もいなくなった家の中。ただ静けさだけが残った。

「オハヨ」

翌日。朝家を出て学校に行こうと玄関のドアを開けたら、進藤京子がそこに居た。

「な……なんでここに……」

「決まってるじゃん。私、大竹君と一緒に登校したいのよ」

進藤京子……こいつ、懲りずにまだそんなことを言うのか。  
僕はまたスイッチを押した。

「今度は何が目的だ？ いい加減にしないと警察呼ぶぞ」

「そう！！ それよ大竹君！！」

出来る限り険悪な顔で進藤京子に悪態をついたら、当の進藤京子は逆に顔を輝かせた。意味不明だった。

「大竹君に……じゃなくて、豹変した大竹君に言われて気付いたのよ。確かに私、とんでもなく酷いことを大竹君に言ってたわ。でもだったらどうすれば虐めを無くせるの……そればかりを考えて大竹君の言葉を思い返してたら……私、本当の本当に大竹君のことが好きになっちゃった」

そう言うと、ニコリと笑って僕の右に体を寄せて来た。

「返事はいらさないわ。とにかく、私と友達になって下さい」

こうして、僕は進藤京子と知り合いになった。何故こうなったのかはわからない。しかし、これだけはわかる。

進藤京子は僕がスイッチを押せる唯一の人間だった。

「三組の進藤さんが二組の大竹と付き合ってるだど!？」

「ああ。どうやら本当らしいぞ」

「……っていうか大竹って誰だ？」

「あれだよ。あのいつも虐められてる奴」

「あー!! あいつか!!」

そんな風に噂は噂を呼び、三日が経つ頃には学年全体がその情報を知っていた。

僕としてはどうってことない。僕の日常はこれまでと同じと言ってもおかしくないから。いつも同じ時間で四人にいびられ、傷付く毎日。

変わった所と云つたら谷口正孝が僕に話しかけたことくらいだろう。いや、これはこれで重大な変化なのかもしれないが、いかなせんその時の言葉が「一人くらいお前に関わる人間が居たのか」だったので、余りにもどうでもよかつたのも重なり、素通りしてしまつた。

だが、進藤京子の行動がキツカケで周りの僕に対する目は変わった。

奴らの目は好奇の目に変わっていた。

まあ、こんな茶番はすぐに終わるだろう。周りが変わっても四人が変わらない限り、僕の生活は変わらない。進藤京子もわかりだ。それに、自分を取り巻く周りの状況が少し変わったくらいで虐めが無くなる訳ではない。

大事なのは、自分自身が変わること。

代わるでもいい。替わるでもいい。なんなら換わるでも良しとしよう。

とにかく、四人に対して早くスイッチを押さなければ。

当の進藤京子本人は僕と付き合っているという根も葉も無い噂を立てられても全く気にしていなかった。寧ろ、喜んでいた。

「だって私、皆に大竹君と付き合ってるって誤解されてるんだよ？」

実際にそうじゃないのは悲しいけど、今は私、それで十分だもん」  
下校時に彼女はこう僕に言った。

進藤京子から話を聞くと、どうやら登校か下校　つまり朝か夕方二人で一緒に歩いている場面を口が軽い誰かに見られていたらしい。そいつが学年全体に言い触らし、今に至るといふ。

「……進藤……さんは……それで……いいの……？」

「うん！！　何言つてんの！！　大竹君と付き合うなんて夢みたいじゃない……！」

だけど僕は確かに見た。

隣のクラスに三山、佐川、矢島、新橋の四人が入っていったことを。

そして、彼らの足が友人と笑いながら喋る進藤京子に向いていたことを。

「また……虐められるかも……」

「ああ、そんなこと心配してくれてるんだ。やっぱり『そつちの』大竹君は優しいんだね。でも私はやっぱり『あつちの』大竹君の方が好きかな」

進藤京子はスイッチを押す前の僕を『そつちの』僕と言い表し、スイッチを押した後の僕を『あつちの』僕と言い表す。言い得て妙だ、と素直に感じた。

「私、大竹君に関係して虐められるなら、本望よ。初めてなのよ。こんな感覚。虐められていいなんて、昔の私じゃ考えらんないの。うん……そうね……」

そこまで言った所で進藤京子は夕焼けをバックに小走りになり、僕の目の前に立った。

「これも虐めを無くす方法なのかもねっ!!」

進藤京子の唇が勢い良く僕の唇に重なった。

何故かはわからない。

何故かはわからない。

だけどこの時、僕はスイッチを押した。

他でもない彼女の為に。

トイレから出てトボトボと廊下を歩くと、谷口正孝に出会った。

「進藤京子という人間は何を考えているんだ？」

出合い頭に谷口正孝は小さくこう言った。

「もう一ヶ月だ。君と関わっているというだけで例の四人に虐められているということも聞いている。なのに何故、進藤京子はどうしようもないクズである君との関係を断ち切ろうとしない？」

僕は立ち止まりはしなかった。そのまま谷口正孝の横を通り、真っ直ぐに教室へ戻ろうとする。

「やはり君はそうなんだな。他人からの余計な干渉は完全に無視し、自分が得すると思われることだけ積極的に取り入ろうとする。周りの状況など気にもしない。だから君は虐められるんだ」

谷口正孝を後ろに歩く僕の目に、谷口正孝が廊下の床をなめている光景が広がった。

僕はスイッチに指を置いた。躊躇はない。恐れもない。口先だけの男になら、僕はスイッチを押せる筈。

「全く……君はどこまでも僕に被る」

だけど、その指に力をかけるようなことはしなかった。

堪らずに後ろを振り返ると、谷口正孝の姿はもう見えなかった。

僕以外にも虐められている人はこの世界に沢山いる。

でもそれは所詮偽造の取り繕いだ。なんの気休めにもならないし、自分が虐められているという事実に変わりはない。

それでも、少し……ほんの少しだけ、心が温かくなる。

谷口正孝もスイッチを持っていたのかもしれない、と僕は感慨深く思った。

僕は今日もスイッチを押さない。

やがて夏が過ぎ、秋になった。

結局僕はあれから一度もスイッチを押していない。進藤さんに対しても。

虐めは続いている。毎日毎日校舎の裏に呼び出されては、暴力を加えられている。この前はプラスチックのバットで全身を叩かれた。その前の日は電気。前の日は鉄拳。

でも、僕はこれでいいんじゃないかと思いは始めている。隣にはい

つも進藤さんが居るし、なにしろ僕は、虐めを受ける毎日に慣れてしまったようだ。

これが日常なのかもしれない。

ある意味諦めの境地。

だけど、僕はこれでいい。

僕はスイッチを押さないまま変われたらしい。現状は何も変わらないままでいい。

そうか。この新しい感覚も、虐めをなくす方法の一つなのかもしれない。

「そんなことないよ。あっちゃん」

そんな僕を僕の家の前で待っていたのは、仁王立ちのさつき姉ちゃんだった。

「最近のあっちゃんおかしいよ……私の家に遊びにも来てくれないし、スイッチの話しなんて全然してくれない……」

息を荒げながらさつき姉ちゃんは、進藤さんの喉元に手をかけた。「……な……何してんのさつき姉ちゃんっ!!」

「この女が悪いのよ……この女が現れてから、あっちゃんはおかしくなったの……だから……私がこの女を……」

「カハッ……や……やめてっ!!」

進藤さんは恐ろしい形相のさつき姉ちゃんの手を無理矢理はがした。

どうしたんださつき姉ちゃんは。こんなさつき姉ちゃん、今まで見たことがない。

「今あっちゃん、こんな私見たことないって思ったでしょ……でもね、違うの……」

そんなこと言いながら、さつき姉ちゃんは僕の背中に両手をまわしてきた。シャンプーの匂い。ふんわりとした感触。柔らかい。

「あっちゃんが頼っていいのは私だけなのに……私を……あっちゃん……」

そう言つたとさつき姉ちゃんは、僕の体を突き飛ばして自分の家へと帰って行つた。

「大竹君、大丈夫？ 全く、ホントに怖いよね、ああいうのって。鬱陶しいっいたらありやしないんだから。大竹君が頼るのは、私だけなのになー」

「うん……うん……」

さつき姉ちゃんの目には、大粒の涙が浮かんでいた。

「やっぱりだ……」

進藤さんと家の前で別れた後、僕は自分の机を手当たり次第捜し、目当ての物を見つけた。

小学校の卒業アルバムだ。

小学生の僕は、卒業アルバムにそれまでの日記を挟んでおいた等親戚のおじさんに入學祝いで貰った日記帳と、新しく買った日記帖の計二十冊がそこにあった。字がくちゃくちゃで見れたものじゃなかったけど、なんとか読めた。

僕が読みたいのは一年生のあの日の日記。

そう。さつき姉ちゃんがチョークの粉を全身に被っていた時の日記。

確か最初の頃だったと思う。まずは初めのページから読んでいき、順番に搜していった。そして、

『六月十五日。はれ。きょう、さつきねえちゃんにへんなことがありました』

見つけた。

『さつきねえちゃんにへんなことがありました。ふくが白くなつて、じゃぐちの水であらつてもきえませんでした。それなのにわらつていました。まどからさつきねえちゃんをみてる人もわらつてました。さつきねえちゃんはぼくと目があうといちもくさんにこうしやの中にかげこんでいきました。ぼくもつられておいかけて、たちどまつたさつきねえちゃんはおをポケーとしていました。かおをあらうところにはおとこの人とおんなの人がいました。さつきねえちゃんはその人たちがじゃまでとおれなかつたんだとおもいます。さつきねえちゃんはいだんをあがりました。あがつたところにもまたいつぱいの人がいきました。みんなニタニタわらつてました。さつきねえちゃんは大声でなきはじめました。だからぼくは

』

そうか……さつき姉ちゃんにも……。  
……僕は昔、こんなことをしたのか……。

翌日。僕は二人の怒声に叩き起こされた。  
寝ぼけている体を起こし、玄関に向かうとそこには見知った顔があつた。

さつき姉ちゃんに進藤さん。  
二人は早朝の道路のど真ん中で、キャッツファイトを繰り広げていた。

「早く帰って下さい!!! 大竹君に近寄らないで!!!」  
下に進藤さん。

「あなたがいるとあつちゃんに迷惑がかかるのよ!!」

上に馬乗りの状態でさつき姉ちゃん。

さつき姉ちゃんの顔は怒りを表していた。

「あ、大竹君っ!!」

パジャマ姿の僕の存在を見つけた進藤さんは、馬乗りのさつき姉ちゃんを力いっぱい押しはがし、僕に抱きついてきた。進藤さんは力が強いことがわかった。

「怖かったよー大竹君!! あの人がね、大竹君を待ってたらいきなり襲い掛かってきて!!」

「……………」

無言のまま立ち上がり、無言のまま僕と進藤さんに近付いたさつき姉ちゃんは、僕の耳に口を近付けてボソッとこう言った。

「その子の笑い方。気をつけた方がいいわ」

忠告ととれる言葉を残し、さつき姉ちゃんは後ろを振り向いて、勢いよく走って行った。

「あの女、大竹君になんて言ったの？小さすぎて聞こえなかったんだけど」

「いや……大丈夫……進藤さんには何の関係もないよ……………」

「……………そう。ならいいわ」

ニッコリと笑う進藤さんの顔を、僕は注意深く見た。

それから何日か経ったある日。

僕は隣のクラスで三山、佐川、矢島、新橋の四人が進藤さんの机の周りを囲んでいるのを見た。

四人が進藤さんに何かを言った後、進藤さんは立ち上がり、教室を出て階段を五人で上がっていった。その間、僕は柱を影に隠れていた。

四人は進藤さんに何をやる気なんだ？

自分でも驚く程気になった僕は、勇気を振り絞って教室に入り、進藤さんと喋っていた一人の女子に聞いた。スイッチを押さずに。

「ああ。京子の恋人の大竹君じゃない」

白川美奈子というその人はとても陽気な人だった。僕が進藤さんと四人のことを聞くと、白川美奈子は包み隠さずこう答えた。

「あの四人、随分前から仲いいみたいよ。夏の終わりくらいからかな」

階段を駆け上がり、屋上へと上がる。ドアを開け、屋上を見た。

そこには、下半身が丸見えの四人が裸の進藤さんを囲んでる姿があった。仰向けになっている進藤さんから甘い喘ぎ声が聞こえる。

「ん？ 今誰かいなかったか？」

僕はとっさにドアの後ろに隠れた。体が動かなくなっていた。

「ハア……ハア……いいから……続けて……アアッ！！ アアンツ！！」

それから一時間。四人と進藤さんは授業をサボり、始まりと終わりの両方のチャイムが鳴り終わった時、進藤さんの喘ぎ声がようやく止まった。

僕はその間、授業にも出ずにずっとドアの後ろに隠れていた。

目には進藤さんの懇願する姿と四人が下に落ちる光景が広がった。スイッチを押そうと思った。初めは怒りよりも先に呆気にとられていたけど、今ではもう怒りが自分の頭に広がっている。

四人にではない。

ましてや進藤さんにもない。

進藤さんのことを完全に信用してしまった、哀れで無知な自分だった。

「さーて、戻るかー」という三山の声が聞こえると、僕は無我夢中のまま階段を下りていた。

スイッチを押そうとは思った。  
思ったけど、押せなかった。

「大竹君っ！！ かーえろっ！！」

進藤さんはいつもと変わらず、笑って僕に近付いてきた。

僕はもう、その笑顔を信じる事が出来なかった。

「今日ねー、あのシユガー先生がね、授業中にも関わらずプリキュアの話し始めたのよー。何歳なのあんた、恥ずかしくないのあんた、みたいなねー。それで私も我慢して聞いてただけど隣のオタガさ、先生、それは違いますとか講義しちゃってー。一時間プリキュアだけで終わっちゃった……って大竹君、聞いてる？」

「……………」  
相も変わらず話しかけてくる進藤さん。

いつの間にか僕は、スイッチを押していた。

「…………お前！！ 屋上で何してた！？」

「え…………」

激昂した僕に呆気にとられた進藤さんは、初めは悩んでいたが、覚悟を決めたのか、それとも最初からばれたら喋るつもりだったのか、一度閉ざした口を開いた。

「ふー…………なんだ、見られてたの」

短い髪を翻し、鋭い目つきで僕を見る。

「そうよ。私は四人の仲間なの」

その顔は、僕が知っている進藤さんの顔ではなかった。  
いじめる者の顔だった。

「夏休みに入る前だったかしら。あの四人が声をかけてきてね。俺達のクラスに大竹っていうクズがいる。そいつの恋人になってく

れないか」って言うてきたのよ。冗談じゃないと思つたわ。あんたのことは前々から虐められてるって知つてたし、見てくれもあつたもんじゃない。お断りよつて返したら、あいつら札束を私に差し出したのよ。それと、気持ちよくしてくれるって」

うつとりした表情で進藤京子は空を眺めた。その空には何が映っているんだろう。金だろうか。性的快樂だろうか。僕にはわからない。

「あいつらはこうも言つたわ。「フリでいい。近すぎず、遠すぎず。初めに手紙をクズの机に入れて校舎裏に呼び出し、勘違いさせる」って」

勘違いとは奴らの策略のことだろう。

四人は自分達が騙されたような表情を取り繕い、手紙を破り捨てた。これは俺達が書いた物じゃない。進藤京子が書いた物だという錯覚を僕に与え、完全に信用させる。

こうして僕は騙されたのだ。

「まあしょうがないわ。ばれたんだつたらもうこの茶番は終了ね。ほら、出て来ていいわよ」

スイッチを押したままの僕の目の前に、どこからか三山、佐川、矢島、新橋の四人が現れた。

「もういいでしょ？ 私も散々稼いだし、充分だわ。後は好きにしてちょうだい」

そう言つて進藤京子は夕暮れの中、消えていった。僕の顔を一度も振り返らずに。あっさりしたものだつた。

四人は僕を羽交い締めにした。

怖かつた。

いつの間にか僕は、スイッチから手が離れていた。

「どうだつた？ 楽しかつたか？」

「残念だつたなあ」

「ま、お前も幻想だつてわかつてただろ？」

「有り得ないもんなあ。お前なんか」  
四人は僕を地面に叩きつけた。

それから僕は、今までとは全く違うレベルの虐めを受けた。思い出したくもない程の。描写にしたくない程の。

最後に四人は僕のポケットの中から何かを抜き取って立ち去って行った。

足はなんとか動いた。視界がぼやけて四人の顔が見えなかった。

僕は何の抵抗も出来ないまま、ふらつく体を動かし、一時間くらいだろうか。家に辿り着いた。

その間僕は色々なことを思い出していた。

登校。

下校。

休日。

平日。

教えながらやる勉強。

メール。

電話。

何気ない会話。

挨拶。

食事。

遊び。

隣には、進藤さんがいつも居た。  
悲しかった。

「あっちゃん……あっちゃん!!」

玄関にはさつき姉ちゃんが居た。

「あっちゃんからメールが来たの!!! 家に戻るっていうメール!

! なのに……なのに……!!」

さつき姉ちゃんはボロボロの僕を見て泣いていた。僕の体を両手に抱えながら、泣いていた。服に涙がかかる。

急いで僕を玄関に運ぶと、さつき姉ちゃんは前々から渡しておいた家の合鍵を使って開け、僕を家の中に入れた。

「うっ……うっ……うっ…… どうして……酷い…… どうしてこんな……」  
泣きながらさつき姉ちゃんは包帯を僕に巻いてくれた。

僕の目は開かなかった。開くことは開くけど、その気力も残っていない。

さつき姉ちゃんは僕の意識が途切れたと思ったのだろう。次第に、ポツリポツリと呟き始めた。

「あっちゃん……昔、私を助けてくれたじゃない……昔のあっちゃん  
は本当にかっこよかったのに……ねえ、覚えてる? 私がチヨーク  
まみれになってボロボロになった時……あっちゃん、私の為に  
叫んでくれて……四年生の男子を殴ったんだよ……なのに私を庇っ  
たせいで……あっちゃん殴られて……私のせいで弱くなっちゃって  
……スイッチスイッチって……私にとってのスイッチは……あっ……  
……あっちゃんなのに……どうしてそれに気付いてくれないの……あ  
っちゃん……私、あっちゃんの……あっちゃんのスイッチになりた  
い……なりたいよ……助けたいよ……うっ……うっ……うっ……」

翌朝目が覚めると、僕は布団の中にいた。

「あ……目、覚めたね」

さつき姉ちゃんが横に座って居た。どうやら途中で本当に意識が途切れたらしい。さつき姉ちゃんは何事もなかったかのように僕に接した。

「大丈夫？ もう、本当に無茶ばかりするんだから。それで？  
スイッチは押せたの？」

「押せた……よ……」

「……へえ。そう」

「押せたよ……押した……けど、駄目だった」

僕はさつき姉ちゃんの顔を真っ直ぐ見た。今まで眩しくて見えなかったさつき姉ちゃんの顔を真正面にしっかりと見つめた。

涙で赤くなっていた。

「……え？ ど、どうしたのあつちゃん!？」

さつき姉ちゃんが驚くのも無理はない。

僕は、さつき姉ちゃんを抱きしめていた。

「ゴメンさつき姉ちゃん。今まで、さつき姉ちゃんを直視出来なかった。いつもいつも僕はさつき姉ちゃんに相談ばかりして、さつき姉ちゃんを見てなかった。だから思い出せなかった。ゴメン」

「え……」

僕の中にスイッチなんてなかった。あつたとしてもそれは僕を変えろるスイッチなんかじゃない。ただ怒って、叫ばせるだけのまがい物だ。

それじゃあ駄目なんだ。

僕は一瞬の怒りではなく、本当の意味で変わらなければならなかった。

心も体もボロボロになっていた時、本物のスイッチが僕を支えてくれた。

さつき姉ちゃんはもう一度泣き、僕を強く抱きしめ返した。泣きながら「よかったよお……よかったよお……」と言っていた。

僕はさつき姉ちゃんに見送られて、学校へと足を向けた。もう怖くない。三山も佐川も矢島も新橋も何も怖くない。

「ようやく変わったか」

電柱の陰に谷口正孝が居た。

手には僕の携帯電話があった。

「すまないな。勝手に使わせてもらったぞ」

言つと僕に携帯電話を投げる。危うく掴み損ねるところだった。

「全て、谷口君の仕業だったの？」

「ああそつだ。僕は生徒会長として、君を見捨てる訳にはいかないからね。調べさせてもらったよ。君のスイッチが何なのかを」

携帯電話の履歴に、さつき姉ちゃんへのメールが残っていた。

「金で五人を動かした。口止め料も兼ねて、な。簡単だったよ。ああいう奴らを操るのは」

フツツと不敵に笑い、話しを続ける。

「大竹。お前を最初入学式で見かけた時、一瞬で悟ったんだ。こいつは必ず虐められるつてな。だからどうにかしたかった。虐めは無くさなければいけない。でも無くならない。ならばどうすればいい？ 答えは簡単だ。虐められている本人を虐められないような人物に変えればいい」

谷口正孝は喋る。

僕は気付いた。やっぱり、谷口正孝は僕に似ている。考え方も、

口調も。何もかもが、僕と重なった。

「谷口君……君も、僕と同じような境遇だったんだね」

谷口正孝はまた笑った。

いじめられる者の顔だった。

「……ああそつだ。僕も昔虐められていた。お前と同じで、スイッチが自分の中にあると信じていた。それを盾にして僕は現実から目を背けていた。けど違ったんだ。それじゃあ変わらない。それに僕は気付けた」

「いつ頃なの？」

「中学三年の後半だったな。僕のスイッチは担任の先生だったんだ。金八先生かと思つたよ」

僕は笑い合う。

僕と谷口正孝。

時期は違えども、僕達二人は同じ境遇だった。ただ谷口正孝は変わった。変わったんだ。

高校デビューを果たした彼を待っていたのは、同じような姿をした僕だった。

「今更だがスマナイ。こんなに遅くなって。金を貯めるのが大変だったんだ。バイトを学校に秘密でいくつも掛け持ちしても、こんなに時間がかかってしまった」

「いいよそんなの。ありがとう。僕は谷口君のおかげで変わったんだから」

「俺は何もしていない……お前が変われたのは、さつきさんって人のおかげだろ」

僕は握手をした。

和解じゃない。これからの為の握手だ。

「早速だが、屋上に向かおう」

谷口君はこう言った。訳を聞くと、「時間がない」そうだ。軋む体をなんとか奮い起こし、階段を昇って屋上に着いた。

「アア……もういや……ヤダ……アアン……ヤダ……ヤダよお……」

そこには、涙目で四人に囲まれて喘ぎ声を出している進藤京子がいた。

僕を見つけると、はっとした進藤京子は苦しみながらこう言った。

「……ゴメンなさい……ンツ……私……大竹君に嘘ついてばっか……本当は前から大竹君のこと見てたのに……アアツ……似てる人だな……って……アツ……思ってたのに……勇気が出なかった……ンツ……怖……かった……逆らえなかった……大竹君に……アアアツ……ンツ……あんな酷いこと言って……」

「うるせえぞ京子っ！！　なんだお前ら？　天下の谷口様にクズか？　俺達になんか用かよっ！？」

僕は決意を固めた。

どうなるかはわからない。所詮僕は僕だ。変わったとしてもそんなに大差はないのかもしれない。

でも僕は、四人に殴りかかる決意を固めた。

横を見ると、谷口君は頷いた。どうやら谷口君も決意を固めたらしい。お金なんか頼らず、自分の力で他人を助けてみせる、と。

「うわあああー！！！！」

スイッチを抱きしめて変わった僕は、屋上を走り出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3332i/>

---

スイッチを抱きしめれば

2010年10月8日15時26分発行